



KAMUY LUMINA

AN ENCHANTED NIGHT WALK
AT LAKE AKAN



KAMUY LUMINAの舞台

KAMUY LUMINA'S STAGE

舞台は、北海道「阿寒摩周国立公園」。火山と森と湖が織りなす原生的な自然に溢れ、日本一酸素濃度が高いと言われている神秘的なエリア。日本で初めて国立公園が誕生した1934年に指定されたその場所は、今もなおそのほとんどが手つかずのまま残っています。KAMUY LUMINAのフィールドは、阿寒湖畔。ここは、アイヌ民族と和人（アイヌ以外の日本人）がともに暮らす稀有な土地。1957年、阿寒の環境保全に務める、前田一步園の前田光子氏は、地元アイヌ民族に土地を開放し、木彫りの作業場などを提供。アイヌ民族の自立を支援したことから、現在も友好的な関係が続いています。

阿寒のアイヌコタン（村）では、古式舞踊と呼ばれる伝統的な踊りや、ムックリ（口琴）、トンコリ（五絃琴）の演奏など、代々受け継がれてきた文化を現在も発信し続けています。中でもアイヌ民族は、文字を持たず、代わりにユーカラと呼ばれる叙事詩を、口承で次の世代に伝え、その文化を守ってきました。短いものから、何日もかけて語られるユーカラもあり、KAMUY LUMINAのストーリーは、阿寒アイヌの四宅ヤエ氏が語った「大飢饉から人々を救ったカケスの神の物語」がベースとなっています。

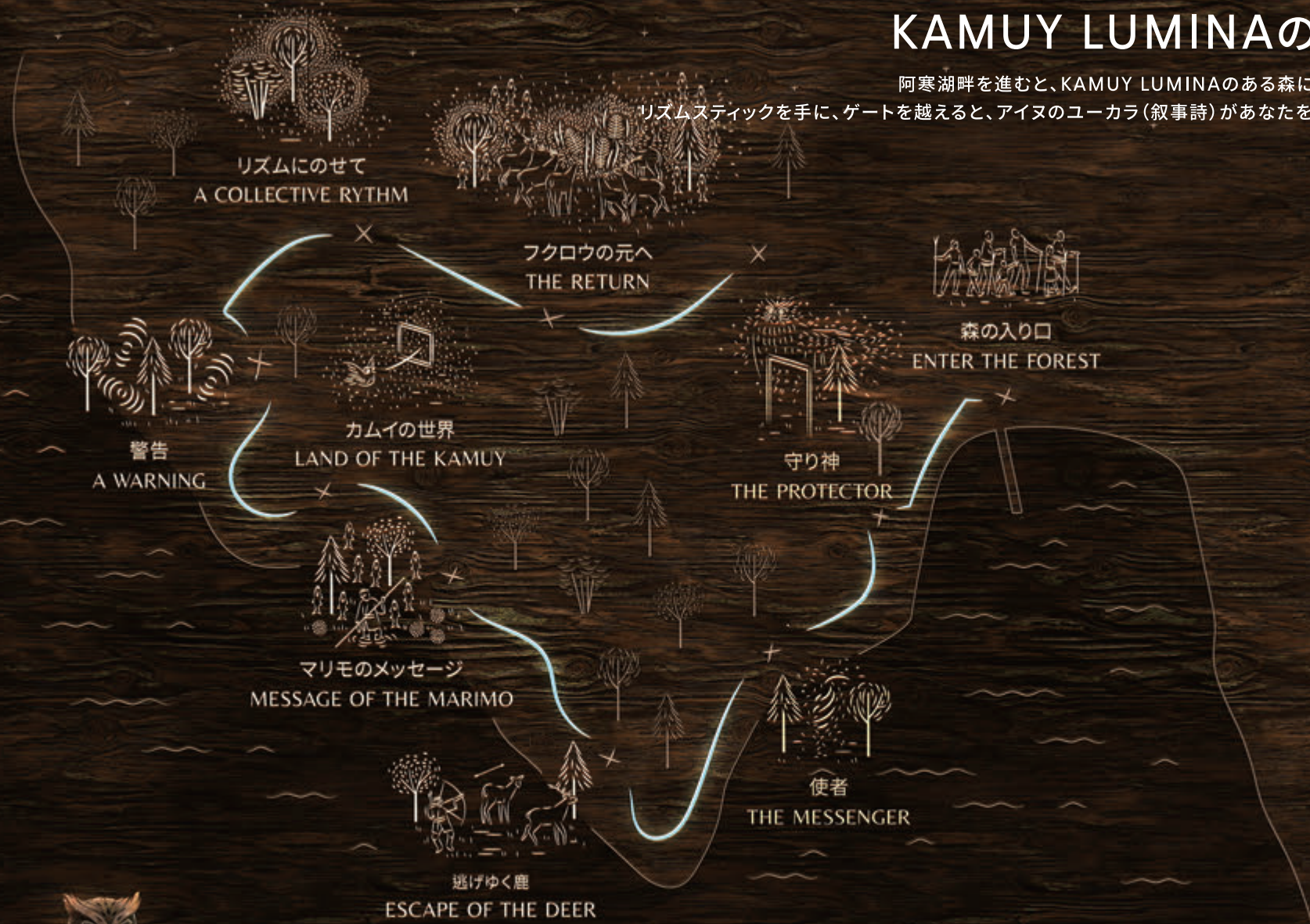
KAMUY LUMINAのゾーンの中で流れている「フーンコ フーンコ フーンコ」というメロディは、シマフクロウの鳴き声を真似たもので、四宅ヤエ氏本人が語ったユーカラの音源を使用しています。また、彼女の親族である平良智子氏が、今回のために新たにこのユーカラをレコーディング。渡辺かよ氏、床絵美氏、郷右近富貴子氏ら阿寒のアイヌが、ムックリやトンコリの演奏、歌で華を添えています。

KAMUY LUMINAは、阿寒アイヌと和人、そしてカナダのMOMENT FACTORYが、手を取り合い、新たな伝統をつくる、革新的な取組みとなるでしょう。なお、この売上の一部は、自然環境保護活動、アイヌ文化振興に寄付され、この森と湖の保全、アイヌ文化の発展に活かされます。



KAMUY LUMINAの世界

阿寒湖畔を進むと、KAMUY LUMINAのある森にたどり着く。
リズムスティックを手に、ゲートを越えると、アイヌのユーカラ(叙事詩)があなたを待っている。



フクロウ

KAMUY LUMINAのナビゲーターであるフクロウは、アイヌの集落全体を見守る神「コタンコロカムイ」と呼ばれ、阿寒のアイヌコタンの入り口でも、大きな木彫りのフクロウとして今日も村を見守っています。KAMUY LUMINAのフクロウは、カケスの隠された英雄的素質を見出し、カムイの世界へ使いに送る使命を担っています。



カケス

フクロウの使者となるカケスは、森一番の美しい歌声の持ち主。カムイのために歌うことがカケスの夢でしたが、歌のリズムをキープすることが苦手であきらめていました。そこで、フクロウは、彼のサポートを私たちに託すことに。この冒険を通じて、カケスはさまざまなことを学び、新しい自分へと進化していきます。

KAMUY LUMINAの物語

KAMUY LUMINA'S STORY

カムイとは、アイヌ語で神々を意味する。人類は決して行くことができなかったカムイの世界。未踏の冒険が、いまはじまる。



1

「守り神」

飢餓が訪れた人間界。フクロウは、この危機を救うため、カムイの世界へメッセージを届けられる使者を探していました。カラス、ヨタカが候補に名乗り出ますが、フクロウは突き放します。そこに、聴こえてきた美しいメロディ。その歌声と光の軌跡を追いかけて、森の中へ。



2

「使者」

美しい歌声の持ち主はカケス。早口で何を言っているのが聞き取れないフクロウは、やっとカケスの言葉を理解しました。それは、リズムがうまく取れないという悩み。フクロウは私たちにカケスのサポートをしてくれないかと懇願します。カムイの世界への冒険がついに始まるのです。



3

「逃げゆく鹿」

深い森の中、木々の間を駆け抜けるシカたち。矢を放ち、シカを捕らえようとするアイヌ。しかし、シカたちは、その矢を受け取ってくれず、次々にカムイの世界へ帰っていきます。フクロウは、この世界にとどまるようシカたちに声をかけますが、願い届かず、走り去っていくのでした。



4

「マリモのメッセージ」

湖のほとりに到着すると、魚たちが、木をつたい、カムイの世界へ帰っていくのが見えます。そこへ、みんなを助けようと阿寒湖の天然記念物「マリモ」が現れました。マリモが奏でるリズムをよく聴き、同じリズムを刻むことができれば、魚たちが戻ってきてくれるかもしれません。

KAMUY LUMINAの物語

KAMUY LUMINA'S STORY



5

「カムイの世界」

カムイの世界に近づくにつれ、森が瞬き、幻想的な光の空間が広がってきます。すると、カムイの世界とアイヌの世界を結ぶ、神聖な窓「神窓」が目の前に。カケスは、この神窓をくぐり抜け、無事カムイの世界にたどり着くことができるのでしょうか。



6

「警告」

カムイの世界で待っていたのは、魚を授けるカムイと、シカを授けるカムイ。動物に敬意を示さず、「送り」という祈りの儀式を怠った人間に怒ったカムイは、動物を人間界に降ろすことをやめてしまったのです。今までの行いを改めなければ、飢餓はこのまま続くことになるでしょう。



7

「リズムにのせて」

カムイの声を心に刻み、前へ進むと、カケスの姿がいつの間にか消えていました。その先で待っていたのはフクロウ。動物たちの魂をこの世界に戻すため、リズムを刻むよう促されます。すると、遠くから微かにカケスの声が。今までのカケスの光の軌跡とは何かが違うようです。



8

「フクロウの元へ」

ついに、動物たちは森に帰り、豊かな自然を取り戻すことができました。姿を現したカケスは、今までの落ち着きの無さから一変、雄弁に話をはじめたのです。これ以降、カケスは、忍耐強く、責任感のある者の象徴として人々からも神々からも親しまれるようになったと語り継がれています。